

戦時下における湯浅八郎のアメリカ滞在の実態

辻 直 人

はじめに

1935年2月より同志社第10代総長を務めていた湯浅八郎(1890-1981)は在任中に、いわゆる「同志社事件」と呼ばれる右派勢力との対立に巻き込まれ、1937年12月に任期半ばで辞職した⁽¹⁾。その後しばらくは無職だった湯浅は、インド・マドラス(現チェンナイ)近郊のタンバラムで開かれた世界宣教会議への出席を乞われて、賀川豊彦、河井道ら20数名と共に日本のキリスト教界代表として1938年インドへ渡った。これはアジアで行われた最初の世界宣教会議であり、欧米中心だった会議からアジアやアフリカへの教勢拡大を象徴する会議となった。

この成果をアメリカで報告してほしいと依頼された湯浅は、日本代表として1人代表団に参加し、1939年1月に渡米する。湯浅にとって15年ぶりの渡米だった。この渡米期間は当初の予定から延長に次ぐ延長となり、とうとう湯浅滞米中に真珠湾攻撃が起きて日米開戦が起きてしまう。湯浅は1941年12月7日日曜の朝、メイン州の無牧の教会で「キリスト者としての平和の使命」という題で説教をしていた⁽²⁾。日米開戦と同時に敵国人になってしまった湯浅が帰国したのは、1946年10月

のことであった。しかし、戦時中湯浅はアメリカで捕虜になっていたわけではない。事実はその逆で、自らの意思でアメリカに残ったのである。日本には家族（妻と息子）が残っており、1942年には最後の交換船がニューヨークを出帆しているにも関わらず、である。つまり戦時期を含めて8年近くにも及ぶ海外生活を経て帰国したことになる。湯浅はこの間、一体何をしていたのだろうか。1939年から戦時下のアメリカ滞在中で、どのような経験をしたのだろうか。そもそも、何故これほどの長期間海外にとどまり、帰国しなかったのだろうか。また、アメリカでの経験がその後の湯浅の言動にどのような影響を及ぼしたのか。戦時下における行動としては特異に見える湯浅の行動がどのような思想信条によって遂行されているのか。以上の点を明らかにすることが、本稿の目的である。

先行研究としては武田清子『湯浅八郎と二十世紀』（教文館、2005年）がある。また、同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想 湯浅八郎の日本とアメリカ』（YMCA出版、1977年）と湯浅八郎他『私の生きた二十世紀』（日本基督教団出版局、1980年）は、いずれも湯浅本人の回想を交えて戦時下の様子が紹介されている。また、既に拙稿「湯浅八郎の国際感覚に対するアメリカ滞在中の影響—イリノイ大学留学経験を中心に—」（立命館大学社会システム研究所『社会システム研究』第36集、2018年）でも戦時下の様子について若干触れてはいる。しかし、今回はその後新たに見つかった史料も用いることで、これらの文献では触れられていない実態を明らかにし、その経験の現代的意義についても考察してみたい。

1. マドラス会議、渡米、開戦までの動き

(1) マドラス会議への出席とシーベリーとの出会い

湯浅が「インドのマドラスの近くのタンバラムにあるキリスト教大学

で開かれる、世界宣教大会に出席してほしい、そして東洋人としてマドラス大会の使命をアメリカの教会で話してほしいという、招きを」受けたのは、1938年11月のことだった⁽³⁾。失業中で自由の身だったため、出席を即答した。日本からの出席者は賀川豊彦、河井道を含む20数名だった。湯浅はこの宣教会議について「新しい時代に対する世界宣教の問題を取り上げようという、非常に画期的な大会でした。これを思想的に指導したのは、オランダのクレイマー博士ですが、キリスト教はただ欧米から輸出されるべきものではなくて、それを受け入れる新しい地域それぞれの貢献の仕方があるべきだという、非常に新しい宣教の理念にたった大会でありました。」と評価している⁽⁴⁾。

先程の引用では、マドラス宣教会議への参加と同時に、会議後アメリカでの講演旅行も頼まれていたように読めるが、実際いつ頼まれたのか確証は得られていない。アメリカでの講演旅行は「アメリカ組合教会伝道部」⁽⁵⁾ (The Foreign Missions Conference of North America)⁽⁶⁾の誘いで、一行は1939年1月にヨーロッパ経由でアメリカに渡っている。湯浅にとって、Ph.Dを取得し且つ信仰の回復も経験したイリノイ大学大学院留学以来⁽⁷⁾、約15年ぶりの渡米であった。この時団長を務めていたのが、アメリカン・ボード外国宣教伝道部教育部長のルース・シーベリー (Ruth Seabury) だった。シーベリーとの出会いはこの時が初めてだったそうだが、その後日米開戦時のアメリカ滞在の世話や戦後の同志社での教育顧問としての1年半の働きなど、湯浅はシーベリーから多くの協力を得ることになる。この講演団はアジアの代表すなわち「中国の代表者、インドの代表者二人、フィリピンから一人、日本からはわたくしというふうな国際スピーキング・チームで、マドラス・メッセージを持って、教会を訪ねて歩」いた⁽⁸⁾。マドラス会議の成果を各地で伝えるため、当初の予定では、講演旅行は2ヶ月ほどの日程だった。

シーベリーのことを湯浅は「実に立派な人と感銘を受けた」と述べている⁽⁹⁾。「本当によく働く人でね、自分は熱を出しているのに団員の荷物を持ち運びにいたるまで、皆のためによく仕えてね、それでいて自分の話の責任はどんなことがあってもなおざりにしない」、分け隔てのない「本当の平和主義者」だった。

ワシントン DC では、レストランで食後のコーヒーを提供する際、皆には瀬戸物のコーヒーカップで持ってきたのに、アフリカの婦人には紙コップで持ってきたことがあった。それを見たシーベリーは「どうして紙コップなのか」と強く抗議をしたのだが、給仕は「あなたの女中には紙コップで十分でしょ」と反省する様子もなく、コップも変えることはなかった。このアフリカ婦人は南アフリカで指導的立場に立っていた人だった。シーベリーは恥ずかしさの余り赤面して「これがアメリカの最も恥ずかしい人種差別の問題なのです。本当にごめんなさい」と涙ながらに謝罪したそうである。このエピソードがどのタイミングでの話なのかは分からないが、戦後、国際基督教大学で湯浅の同僚となる武田清子は、この話をシーベリーと湯浅の双方から聞いたという⁽¹⁰⁾。湯浅はシーベリーを心から信頼しており、この出会いが湯浅の思考に大きな影響を与えたことは、戦後シーベリーを同社に呼んだことから分かる。

(2) 武田清子との出会い

神戸女学院で学んでいた武田清子は、デフォレスト (Charlotte B. DeForest) 院長ら女学院教師の勧めにより、神戸女学院の姉妹校であるアメリカ・ミシガン州のオリヴェット大学 (Olivet College) に交換留学生として1939 (昭和14) 年に派遣された。そのオリヴェット大学に武田の留学中の1941年1月から1学期の間、湯浅は客員教授として招かれ、「Oriental Culture」についての講義をしている⁽¹¹⁾。アメリカ会衆派教会の指導者ダグラス・ホートン (Douglass Horton) からの

湯浅宛書簡（1940年7月10日付）によれば、オリヴェット大学学長ジョセフ・ブリューワー（Joseph Brewer）がシカゴのウィルソン夫人を通じて、一定期間大学で過ごせないかと打診してきたのだった⁽¹²⁾。

実は武田と湯浅の出会い、この時が最初ではない。神戸女学院は教育方針としてキリスト教と国際主義を掲げており、在学中もダグラス・ホートンなどアメリカキリスト教界の指導者をたびたび講演に呼ぶなどしていた。また、1938年の夏、同志社総長を辞任して当時失業中だった湯浅を神戸女学院YWCA（武田が会長を務めていた）の夏期修養会の講師として招いている。院長デフォレストも、湯浅のことを「私の深く尊敬する友」と語っていたといい、そのことが非常に印象的だったと武田は回想している⁽¹³⁾。

また、武田もイースター休暇にシーベリー宅に招かれたことがあり、その時も「湯浅教授がこのお宅でいかに尊敬と親愛感をもって大切に扱われているかがよく感じとれた」という⁽¹⁴⁾。

(3) 渡米後の動向

日米開戦までの湯浅の動向を知る史料として、イリノイ大学UMCA主事のヘンリー・ウィルソン（Henry Wilson）に当てた手紙が同大学資料室に残っている。以下紹介する湯浅のウィルソン宛書簡は全てイリノイ大学資料室所蔵のものである。

マドラス会議報告のため再渡米し約2ヶ月たった1939年3月3日、ミシガン州グランド・ラピッズのホテルから湯浅より送られたウィルソン宛書簡が同時期の書簡では最も古い。当初は2ヶ月の予定だったので講演旅行も終わりに近づいていた頃のはずだが、その書簡によれば、「今後少なくとも数ヶ月か1年ほどはアメリカに留まって社会的要請により（各地を）訪問する予定」と綴られているので、日程の延長が決まっていたということになる。講演旅行はかなりスケジュールが過密だったよ

うで、同行していたインド代表は既にチームから離れシカゴのホテルで寝込んでしまったらしい。湯浅本人も疲れを覚えつつ、学生時代を過ごしたイリノイ大学周辺を久々に訪れるのを楽しみにしていると綴っている。

湯浅がウィルソンへ送った次の書簡は1939年3月19日付で、インディアナポリスのホテルから送ったものである。昔懐かしい街でウィルソンや旧友に会えたことを心から喜んでいる。ウィルソンが湯浅の置かれた困難を心に留めてくれていることへの感謝が綴られ、状況が改善したら自らを役に立たせたいと前向きな姿勢で締めくくられている。

次の1939年5月9日付では口調が変わり、これまでの疲れた、どこか弱気な文面から一転して、湯浅よりウィルソンに力強い報告がされている。この書簡の重要度を鑑み、全文を紹介したい。

1939年5月9日

親愛なるウィルソン様

この手紙を手にする頃、お元気で過ごされていることを望みます。

4月には、美しいコネティカット渓谷を越えてアマースト、ディアフィールド・アカデミー、ノースフィールド神学校とダートマスを訪ね、今は中西部の会衆派施設を巡回しています。最初にオーバーリンから始めて、ボストンに戻るまでにカールトン（ミネソタ州）、オリヴェット（ミシガン州）と回る予定です。私は今アメリカン・ボードの管理下にいます。アメリカン・ボードのグッドセル博士は計画を立てていて、それが実現すれば、私は今しているような働きを更に数か月続けることができます。ダグラス・ホートン博士も私の滞在を有意なものにしようと考えてくれています。ですので、恐らく私はこの国にもう12ヶ月かそれ以上留まることになりそうです。もはや私が科学研究の分野に戻

ることは難しく、キリスト教国際主義（Christian internationalism）の分野でなら、より自分自身を役立たせる機会がありそうです。それは冒険です。しかし神様が共にいてくださる冒険です。私は会衆派教会の先駆的な事業に協力できることを喜んでます。計画はまだ構想段階ではありますが、少なくともあなたにはお伝えしないとイケないと思った次第です。

あなたの好意に感謝します。心を込めて。

敬具 湯浅八郎

4月に入り、湯浅はアメリカン・ボードの管理下に入り、会衆派教会との関わりを強めていった。上で紹介した書簡では、積極的に東部のアマーストから中西部オーバーリンにかけての会衆派施設を回っている様子が報告されている。そして、引き続き12ヶ月はアメリカに滞在することになるであろうこと、今更科学研究の分野に戻ることは難しく、キリスト教国際主義に関する分野でなら活躍できそうであること、会衆派教会の先駆的事业に関わって嬉しいことを伝えている。

このような新たな意気込みを得た背景を考える手がかりとして、湯浅が当時関わっていた会衆派教会の動きについて紹介したい。同志社社史資料センター所蔵の湯浅史料には、「会衆派主義再考運動（Re-thinking Congregationalism Movement）」に関する文書が残されている。この動きは1937年秋から始動し、シカゴ、ニューヨークなど9つの地域ごとのグループに分かれ、会衆派教会の今後の在り方を考えるものだった。湯浅は1939年1月に渡米しているので、最初から直接この動きに関わっていたわけではない。しかし、こうした動きに関する史料が残されているのは、湯浅自身にもその議論が共有され、未来の教会の在り方に対して新たな視座を得たであろう。この動きの中心メンバーの1人がダグラス・ホートンで、特に「アメリカ会衆派教会のエキュメニカル運動への貢献」が中心的な議題の1つだった。こうした会衆派教会との関わりが、湯浅の思想をキリスト教に基づいた国際連携という方向へと向

けさせていったと考えられる。また、会衆派教会に関わっていたことが、湯浅を一層民主的志向へ促していったとも考えられるだろう。

1939年7月25日付のウィルソン宛書簡では、湯浅はジュネーヴでの欧米の諸教会の指導者が集まった「非公式な会議」(informal conference with leaders of the Church universal)に参加していたこと、その後はYMCAの世界委員会開会式に招かれていたこと、ニューハンプシャー州ウィニペソーキー湖(Winnepesaukee)での会議には4日遅れることを報告している。相変わらず多忙な日々を送っている様子が分かる。ヨーロッパでは、戦争への緊張度の高さに驚き、イギリスやフランスはドイツに対し断固とした態度を取っていることも報告している。

ジュネーヴでのキリスト者平和会議で出会ったジョン・ファスター・ダレス(John Foster Dulles)は、湯浅にとって印象深い人物だった。ウィルソン宛書簡には登場しないが、湯浅は回想録の中でダレスの平和主義についてたびたび言及している。ダレスはジュネーヴ会議で議長を務めていた。

ダレスは、父が長老派の牧師で、第一次世界大戦後のヴェルサイユ講和会議にはアメリカ合衆国法律顧問として出席し、1951年サンフランシスコ講和会議の際に国務長官を務めていた。いわば、国際政治におけるアメリカの中心人物であった。ダレスはヴェルサイユ講和会議で、ヨーロッパ諸国の政治家の「頭の古さというか、頑固さというか、この際敵をやっつけるといったような、道理の通らない、戦勝者の驕りと、そうして二度と再び敵を立ち上がらせないとといったような見地からの過酷な降伏条件を押しつける、この近視眼的な物の考え方」⁽¹⁵⁾に憤慨したという。その時の経験を基に書かれた著書『戦争と平和と変化』(*War, Peace and Change*)を、湯浅は1939年ジュネーヴでのキリスト者平和会議でダレスから直接渡されていた。ダレスは第二次世界大戦が始まって以降、教会を通して平和運動を推進し、「恨みを果たすとか、こ

の際、敵をこてんこてんにやっつけてしまうとかという、そんな考え方ではいけない、あくまでも人道に即した、共存共栄の可能な条件で平和というものが結ばれなければならない⁽¹⁶⁾と主張した。こうした戦時であつても平和活動がアメリカ各地で組織されていく、日本と正反対の実態を目の当たりにして、湯浅は非常に驚いている。

同書簡では、5月9日付の続報として、アメリカン・ボードのグッドセル博士が湯浅のために新たに9月から1年間の計画を立ててくれたことを報告している。具体的には、ニュー・イングランドの会衆派教会を、各教会1ヶ月ほど滞在しながら巡回し、エキュメニカルなキリスト者同士との交流を新しく経験をするようになったという。このようなユニークな機会を楽しみにしている、と同書簡は締めくくられている。

ウィルソン宛1940年8月27日付は、青年キャンプに参加していたカリフォルニア州ロマ・マー (Loma Mar) から投函されている。既にヨーロッパでは英独戦争が始まり緊張が高まっている中、アメリカの対応に注目しつつ、自らの今後の予定を報告した内容になっている。8月13日から20日にカリフォルニア州バークレーで開かれた会衆派教会大会において、国際教会関係 (international church relations) 部会の名誉会員に指名され、任期は1941年8月31日と定められたので、更にもう1年アメリカ滞在を続けることになった。今後の主な活動は、教会の普遍化へ寄与すべくエキュメニカルな会衆主義を強めていくために、ヨーロッパ、アジア、アフリカと北アメリカの各会衆派団体 (Congregational group) を結びつけることであった。すなわち戦争が起りつつある世界情勢で、教会の活動を通じて世界の交流を盛んにし、統一的キリスト教運動を推進していくための第一歩としたいと意気込みを語っている。

1940年8月17日の会衆派教会大会で、湯浅は、前年に持たれた国際セミナーの報告をしている⁽¹⁷⁾。それは、イェール神学校で1939年8月30日から31日にかけて開かれた集会で、ダグラス・ホートンの中

心に29名の会衆派教会代表者が参加していた。参加者には中国、フィリピン、セイロン、インド、メキシコ、トルコ、イギリス、スウェーデン、ドイツからの代表者も含まれていた。この大会での報告で、湯浅は、世界のキリスト者同士の共同体こそが世界にとって大きな社会的希望である、という深い確信を持った。すなわち、全ての国のキリスト者はキリストにおける共通の絆のおかげで、世界に奉仕するために結び合わされた同志であり、このコミュニティは会衆派である者たちが最初は会衆派教会内で、それからその他の教会へと輪を広げていくように努力することが必要であると実感したのだった。

ダグラス・ホートンから、こうした会衆派内の交わりを地域から世界へと広げていくため上述の国々の代表の他、アメリカの教会の代表者、並びにイングランドおよびウェールズの会衆派連合からの代議員も加えて委員会を設立することが提案された。

このように湯浅は欧米各地での会衆派教会を中心とした集いに積極的に参加し、世界を視野に入れた教会合同運動、キリスト教国際主義的活動に邁進していったのである。

2. 日米開戦後アメリカに残った理由

湯浅は1939年1月に渡米して以降各地を精力的に飛び回り、特に会衆派教会の信徒たちとの交わりを深めていった。その後アメリカ滞在が延長されて、とうとう真珠湾攻撃による日米開戦となってしまった。「全ての通信手段は遮断された。妻と息子は空襲のターゲットになってしまった。」⁽¹⁸⁾と自覚しつつも、湯浅は熟慮の結果、母国日本に帰らないことを決断した。1942年6月に最後の交換船グリプスホルム(Gripsholm)がニューヨークから出航した際も、結局乗船せず、留学生としてアメリカに滞在していた武田清子を見送りに港に行っただけ

だった⁽¹⁹⁾。家族（妻と息子）を日本に残しながら、何故湯浅はアメリカに留まることを選んだのだろうか。後日談として、湯浅は「日本に帰ったなら、必ず軍部はわたくしを、わたくしの意志のいかんにかかわらず、徴用するだろう、そしてたとえば、心にもないアメリカ向けの放送をするといったようなことに使われるに違いない」⁽²⁰⁾と、当時判断したと語っている。更に、以下のようにも回想している。

大事なことは戦争のあとにくる平和であり、日米戦争など二度と起こらないような内容の平和をつくりださなければならないと。そこで、平和の準備に少しでも役立ちたいという願いでアメリカに残りました。平和問題について用意周到に考えていたジョン・ダレスさんのような人と交わりがあったことも、わたくしにとどまる決意をさせた理由の一つです⁽²¹⁾。

一方、当時の湯浅が日本へ帰国しなかった理由を自ら説明する史料が残っている。“I Chose to Stay in America”という題の7頁ほどの文書は、アメリカン・ボードによって1942年に発行された。それによれば、帰国しなかった理由を、湯浅自身は以下のようにまとめている。

まず、思いがけず敵国人になった湯浅だったが、にも関わらず、アメリカ当局の対応は品があり且つ慎重で（decent and considerate）、友人たちは非常に親切に接してくれて、アメリカにいても全く安全で、非常に居心地が良かった、と述べている⁽²²⁾。また、「私は100%日本人だが、しかしキリスト者の日本人であり、十字架のエキュメニカルな交わり（the ecumenical fellowship of the Cross）に属している存在でもある」と自らの立場を捉えている⁽²³⁾。つまり、湯浅は信仰的確信を持って戦時下のアメリカ滞在を決断したと説明し、続けて以下のように述べている。

私は、今後世界中のクリスチャンが協力して取り組むことで達成されるであろう真新しい世界秩序に基づき、人類兄弟に関する私の信仰者としてのビジョンに従って、将来進むべき道を有用なものにしたいと思いました。

このような考えに至ったのは、前節で紹介した、アメリカン・ボードの活動を通じての国際交流とエキュメニカル運動に強く関わった影響と考えられる。湯浅は、更に同文書において、今後の活動における7つの具体的な目標を掲げて、自らのアメリカ滞在の意図を説明しているので、ここで紹介しておきたい。

(1) キリスト者同士の交流の証人になる

アメリカ滞在4年間で湯浅は、人種や信条、国籍、歴史、戦争といった障壁を乗り越えるキリスト者同士の交流を経験した。湯浅は「キリスト者同士の交流は、戦時において相互理解を促すために残された唯一の絆であり世界的一致である。私たちは、キリスト教精神によって新世界秩序を構築するという希望を強固な土台としている」と考えるに至り、信仰者同士の交流を深めるような活動に関わりたいと願っていた。

(2) 日本基督教団の代理となる

湯浅は日本基督教団の設立について、次のように捉えている。すなわち、「日本基督教団の設立は、プロテスタント宣教師たちの足跡におけるもっとも偉大な成果である、その輝かしき成果の大部分は、アメリカの宣教師や支援者たちによる献身、奉仕と犠牲に拠っている」。また、「日本人は信仰のあるなしに関わらず、アメリカには永遠の負債 (lasting debt) を負っている」とも述べている。何故なら、「アメリカのキリスト者たちが神からの人類への最高の贈り物であるキリストを連れてきてくれた」のであり、それにより「恒久的に国民の精神生活を豊かにし活

気づけることになるからである」とアメリカに対し最大級の賛辞を送っている。

この日本基督教団に関する説明は、極めてアメリカ寄りの解釈になっていると言わざるを得ない。確かに、教派合同は明治初期以来宣教師たちの長年の念願であった。日本基督教団は超教派の組織として期待された面はある。しかし、実際は1941年の宗教団体法という戦時政策により誕生した教団である。その点について湯浅は一切触れず、アメリカ諸教会や宣教師への恩義として捉えている点に、湯浅思想の特徴があると指摘できるだろう。

(3) エキュメニカル教会のシンボルになる

湯浅は、エキュメニカル運動こそが、世界の一致をもたらすと期待を寄せていた。「肌の色、国籍、イデオロギーに関係なく、世界のキリスト者はこのエキュメニカル運動に属しており、教会の一致合同には、人類の救済というキリスト教の潜在的な力が込められている」、と主張する。また、「自身は取るに足らない存在ではあるが、日本人キリスト者として、普遍教会（Church universal）のシンボルとなりたい、教会はナショナリズムも戦争も超越し、お互い敵同士だったとしても教会では兄弟であることを気づかせたい」と述べている。京都大学や同志社時代に経験したナショナリズムとの衝突により疲弊した心を、湯浅は国際的なエキュメニカル運動によって回復していったのだろう。如何に、渡米してアメリカン・ボードや会衆派教会から受けた影響が大きかったかを物語っている。

(4) 和解の任務のため

現在は戦争で各国が混乱し傷ついているが、「人類は再び和解しなければならず、国家は遅かれ早かれ何らかの方法で平和な生活を取り戻し、

協力して発展していく手段を見つけなければならない」。しかし、「国際的な和解と協力は、戦争中の国家が互いを許し合うことを学ばなければ不可能」である。国家が相手国に対する善意 (goodwill) を否定し、自らの権利を主張することだけに満足しようとしている間は、許しは存在しない。「全ての国家に悔い改めが必要だ。しかし、悔い改めた市民だけが、国家を悔い改めさせることができる」。これこそが、湯浅が「この4年間、非常に不人気であっても霊的には積極的な価値のある悔い改めについて、懲りずに強調し続けている理由」であるという。国際的な和解と再建は神の「贖いの愛」による悔い改めから始まると、湯浅は主張しているのである。実にキリスト教信仰にのっとった、伝道的な訴えと言えよう。

湯浅はここで、自分にとって悔い改めとはすなわち日本のための悔い改め (penitence for Japan) である、とも述べている。日本が悔い改めて新しい国となり、他国と新しい和解の関係になるために、湯浅自身がその悔い改めを祈り実行していこうという決意を表明している。国際平和の実現のために、湯浅は悔い改めのキリスト教信仰を強く自覚していたのであった。

(5) 公正で慈愛に満ちた平和のために働く

湯浅は、世界を悲劇的な戦争に陥れた人類共通の悪の問題を解決することは、たやすいことではない、と考えている。この問題を解決するためには、ただ正義を振りかざしているだけでは不十分であり、「慈愛の精神 (charity) が絶対に必要だ」と湯浅は主張する。また、世界の平和が続くためには、「正義を愛で柔和にする必要がある」。そして「我々は、地球上の全ての人々に平和の実現する可能性を現実を示すために」、人々の知性と善意、そして何よりも創造的な愛 (creative love) といった、世界を変えることのできる力の源を結集させなければならない。「世

界平和の実現は世界中の善良な人々や親しい友人とだけでなく、敵にとっても最も緊急で最も誠実な願望である」と考えており、「自分の追求してきたことを分かち合うことで、世界に貢献したい」と、湯浅は強く願っていた。

(6) 日本に対してはアメリカとアメリカ人のことを伝え、アメリカに対しては日本と日本人のことを伝える

戦時においては、敵についてよく知らずに、自分勝手な判断や間違った情報によって、余計な費用や大きな損害を及ぼすことがある。人類は共存することを学ばなければならない。国家同士の共存も同様で、「隣人のことを徹底かつ建設的に知ることは、平和の実現のためにより重要であるから、アメリカも日本も、互いをもっとよく知るべきだ」と湯浅は訴える。そして「時が来たら、両国相互の理解と信頼、感謝を回復するために、日本人に対してアメリカ人の生き方を伝え、逆にアメリカ人に対しては日本人の生き方を伝える役割を担いたい。」つまり湯浅は、日米間の平和の橋渡し役になりたい、と切望していた。

ここでも見られるように、湯浅自身はナショナリズムに縛られることへの危惧を抱いていた一方、国籍からの脱却については、余り想定していなかったように考えられる。後年の回想録では、アメリカに残った「もう一つの大切な理由として、戦争を悩み、痛みを感じているクリスチャンが日本にもいるということの証として、いわばそういう少数の日本のクリスチャンのシンボルでありたいという願いがありました」と語っている⁽²⁴⁾。

また、「わたくしはこれでも日本生まれの日本人なんでしてね。戦争中に敵国のお先棒をかつぐようなことはすべきではないと思いました。祖国を裏切るようなことはしたくないと思いましたから、アメリカ政府の関係したいろいろな要求はいっさい断りました。」⁽²⁵⁾とも語っている

ように、ナショナル・アイデンティティは普遍的な世界教会が実現しても残る、と考えていたと思われる。

(7) 苦難を分かち合う

戦争により「人々は直接間接に様々な苦難を受けていた。そうした苦難を軽減する最も効果的な方法は、その苦難を自分のことのように相手と分かち合うことである」と湯浅は訴えている。そしてその視線は、特に日系人たちに向けられている。

私が苦難を共有したいのは、アメリカにいる日本人たちだ。日系人である彼らはアメリカ市民でもありながら敵国人として収容されている。彼らはいわゆるアメリカの民主主義に幻滅し、いわゆるアメリカの自由絶望しているだろう。

日系人の強制収容という現実、湯浅はアメリカの現実を見ている。民主主義や自由という目標は、世界においてまだ実現されていない。しかし、アメリカはこうした理想の実現を段々と果たしてきている、と考えている。これは、戦時でも繰り広げられていた平和運動やエキュメニカル運動に湯浅自身参加して得た実感であろう。「幻滅した日系人は、国内外で理想の実現のために戦っている忠誠的なアメリカ人と連帯することによって、日系人はアメリカ市民権を手にかけていることへの感謝を表す素晴らしい機会を有している」と主張している。

このように湯浅は、在米日本人、特に日系人への同情を抱くと同時に期待もしていた。戦時下の主な活動は、在米日本人を対象にしたものだった。ただし、日系人の捉え方については、そう単純に受け止めるべきではないだろう。実際日系人の心情は一世と二世でも世代間格差が見られ、更に国家への忠誠心も人によって異なっていた。アメリカへの忠誠を果たすことを拒否した日系人は、カリフォルニア州北限にあるトゥーリー

レイク収容所に送られていたことは有名な話だ。よって、湯浅の日系人の捉え方は一面的とも考えられる。実際に、湯浅が在米日本人に対してどのようなことをしたのかという点については、後述する。

以上、資料“I Chose to Stay in America”を詳しく紹介してみた。見てきたように、湯浅は日米開戦後、交換船で帰国することもできたのに敢えてアメリカに留まったのは、1つには帰国しても日本軍部に徴用されて彼らの都合いいように使われてしまうことの回避と、もう1つは開戦以前より経験してきたキリスト教信仰に基づいた世界平和への活動やエキュメニカル運動に続けて関わりたいという願いからだったと言える。

3. 戦時下の実態

(1) 開戦直後の様子

真珠湾攻撃が始まって、湯浅自身は日米開戦したことは、実はすぐには知らされず、翌日アメリカン・ボードの事務所に電話をして初めて知った、と本人は回想している⁽²⁶⁾。その時泊めてもらっていたシーベリー宅に、そのまま6ヶ月間保護されることになった。まもなくして地域の巡査からスパイ容疑でシーベリー一家を訪ねてきたこともあったが、日本から来たキリスト者ということで捕らえられることもなかった⁽²⁷⁾。行動の自由は制限されていて「一晩でも登録した住所から離れるためには、一週間前に許可を得ておかなければならないという状態」⁽²⁸⁾だったが、収容所に送り込まれることもなく、「戦争中アメリカにいて、迫害とか脅迫とか暴力を体験したことは絶対に」なかった⁽²⁹⁾。日本にいる家族にも、しばらくして国際赤十字を通して25文字のメッセージを送ることができた。

シーベリー宅は世界のキリスト者たちが集う場所になっていた。1942年のクリスマスはロシアから逃れてきた家族がホストとなり、祝会を開くことになっていたそうである。また、オレゴン出身でその後收容所から逃れてきた日系人フランシス・マエダ（新しいアメリカン・ボード教育局主事）も加わる予定だという⁽³⁰⁾。こうした国際的な交流を湯浅はアメリカで戦時中も体験していたのであった。

(2) 在ニューヨーク日本人救済活動

行動範囲が狭かったとはいえシーベリー宅で安全に守られて過ごしていた湯浅は、当地より広い活動を求めて、ニューヨークに出ることを申請して許可を受け、1947年5月にメソジスト日本人教会のアルフレッド・アカマツ牧師夫妻宅を間借りしてニューヨークへ移住した⁽³¹⁾。

ニューヨークに移りますと、ニューヨークは広いですから、たとえ市内だけでも、相当仕事ができます。わたくしのした仕事は、その当時ニューヨーク市にできた、主としてニューヨークにいた日本人救済のための委員会（Church Committee for Japanese People）をお手伝いすることでした⁽³²⁾。

当時、ニューヨークではアメリカに出稼ぎに来ていた日本人が相当数いたが、戦争が始まると皆解雇されたという⁽³³⁾。在ニューヨークの日本人救済活動を始動したのは、当時のニューヨーク市長ラフカディオ・フィオレオ・ラガーディアだった。開戦後失業して住むところもなくした日本人たちのために市の倉庫を開放し、ベッドと食事を提供し始めた。その世話をする委員会として、日本人救済委員会が組織されたのであった。この委員会のチェアマンは、メソジスト派の宣教師であったチャールズ・アイグルハートの夫人だった。「だから、戦争になっても、日本に来ていた宣教師たちは、アメリカに帰って日本のために奉仕をして下

さった。これは、一つの立派な記録であったと思います。」と湯浅は元宣教師たちの働きを高く評価している⁽³⁴⁾。その後訪れる日系人収容所でも、多くの宣教師経験者が日系人の世話をしていたので、恐らく湯浅も彼らと出会ったに違いない。湯浅は次のようにも回想している。

だからわたくしは、アメリカの教会関係の人で日本の人たちに関心を持っている人びと、とくに、かつて宣教師として日本に行ったことのある人たちと、失業して生活に困ったり、身の危険を感じたり、あるいは法律上の問題を抱えてどうにもできない一世たちとの間で、リエゾンの役を果たしたいと思いました。そのような仕事をする望みがあったのです⁽³⁵⁾。

湯浅は戦時下のアメリカで、自分の働ける場所を見出していた、と言えるだろう。

(3) 日系人収容所慰問

ニューヨーク在住の後、今度は西海岸の強制収容所を訪ねて日系人を慰問している。

2(7)で前述したように、湯浅は日系人に対して、財産を失い人権を無視されて狭い場所に収容されてしまっている事実 zu 一定の同情を示していた。一方で、収容所を慰問する時に湯浅は、「たとえいまは憤慨しても、不安に怯えて不信を感じても、何とかしてアメリカに信頼をおいて、再び平常なアメリカ生活ができるように、また、できるのだということをお考えなさい。アメリカがあなたたちの国なのだから、絶対に日本に引き揚げて帰るなんていうことを思わないで、アメリカに土着して、立派なアメリカ市民としてやっていくことを考えなさい」と説いて回った⁽³⁶⁾。マンザナ収容所ではこのような話を受け入れられず、もう少しで袋叩きにあう目にも遭ったという。また、収容所での日系人たちが刺繍や紙細

工、布細工、大工、習字といった民芸品の制作に勤しむようになったことに注目し、「アメリカに来て苦しい労働を続けていた人たちが、あのような環境の中で、こうした素晴らしい能力を発揮したというのは、日本人独特の民族的資質だと感じました」⁽³⁷⁾と語っている。

(4) アメリカ人との交流

実際に、湯浅はアメリカで多くのキリスト者と交わりを持っていた。そのことを示すのが、『人への善意』(*Good Will to Man*)という題でまとめられた書簡集である。日米開戦直後、すなわち1941年12月から翌年1月頃にかけて、両国の関係や湯浅の状況を思いやり、送られてきた手紙や電報、カードなど27通を集めた内容である。そのうち1通を取り上げて紹介してみたい。

1941年12月8日、日米開戦翌日に書かれたネブラスカ大学YMCA主事の手紙の一部は以下の通りであった。

ここ最近の我々両国間における交渉を見守りながらあなたのことをずっと考えていましたが、昨日の午後、何よりも増して悪いニュースが起きてしまいました。これで、世界の悲劇が完成してしまいました。

(中略) 昨夜、教会の大学関係者で話していた時、牧師はキリストの愛の必要性和敵対行為が起きたことへの許しが、今回の場合は双方向に必要だと語っていました。祈りに導かれたある学生は、アメリカが95%責められるべきだと言いました。私が今まで多くの人と話をしましたが、彼らはとても落ち着いた態度をしていました。彼らこそ自発的な意思のあるキリスト者です。(後略)⁽³⁸⁾

同書簡は、教会の中で日米間の戦争について冷静に語り合い、却ってアメリカ側に非があるような発言も見られたと報告しているのである。同じ状況下での日本の教会には、このような自由はなかった。アメリカ

教会のこうした懐の深さに湯浅も心を留めていただろうし、戦中でもアメリカの友人たちと交流を持っていたことは、大きな励みだったと考えられる。

まとめ

湯浅八郎は同志社総長を辞任後（1937年12月）、神戸女学院の修養会に呼ばれることもあったが、1938年12月からはマドラス会議に出席し、翌年1月にアメリカへ渡り、マドラス会議の成果や日米関係をテーマに講演をして回り、会衆派の集会に参加したり、大学の特別講師をしたりと各地の集会に参加していた。1941年12月、真珠湾攻撃が起きたその日もメイン州の教会で説教していたのだが、敵国人になったことで、しばらく行動の自由がなくなってしまう。といっても、アメリカ講演旅行の団長だったシーベリーがボストン郊外の自宅にかくまってくれていた。半年ほど行動制限の後、1942年5月からはニューヨークで日本人救済活動に勤しんだ。更にその後はカリフォルニア州等の日系人収容所を訪問して回り、日系人を慰問した。

湯浅八郎の戦時下の行動は、一貫して会衆派教会とアメリカン・ボードに支えられて、エキュメニカル運動を目指し、民族も国家も超えた人間の連帯を目指すためのものだった。湯浅自身、同志社事件で傷ついた心を、こうしたアメリカの教会での温かい交わりで癒していたのだろう。また、狭いナショナリズムを超えて広い世界的視野で平和を考える、キリスト教的活動に強く共感し、キリスト教国際主義の実現こそが、戦後の世界平和の鍵と考えていたのだった。その精神が、戦後の同志社や国際基督教大学での教育活動にも生かされることとなった。

1946年10月に帰国して同志社総長に返り咲いた後、同志社教育顧問としてシーベリーを招聘し、同志社でのキリスト教活動を盛んにした。

それと同時に、兄湯浅三郎らが創設した新島学園中学校・高等学校の初代校長及び初代理事長にも就任した。湯浅は開校2年目の教師会（1948年）で、「六・三制は制度の切り替えではなく、教育内容・精神の切り替えであること」「教育においては世界の市民としての高い人間性を持つ人材を育て、国際的視野の広い、正しい心の持主を生み出す新島先生の理想を具現する新学園を育て上げたい」ことを語っている⁽³⁹⁾。戦中の日本軍国主義への反省と、自らが戦時下体験してきた国際主義的視野を持った人物を育てることが戦後教育の目的であると考えていたのである。

1950年からは国際基督教大学初代学長に就任しているが、今でも続けられている入学式での世界人権宣言への署名も、湯浅なりの世界平和への寄与を目指す人物の養成の表明だったと言える。

湯浅の主張は、キリスト教を土台として国際交流と世界平和の実現を模索するものであり、超国家的な思想を含んでいた。ただし、ナショナル・アイデンティティそのものを超越するものではなく、アメリカを背景にした主張という点において限界を指摘できる。

湯浅の戦後の活動については、改めて考察してみたい。

本稿は科学研究費基盤研究(C) (一般)「日本対外学術文化交流における戦前と戦後の連続性に関する歴史的研究」(課題番号 19K02514)による研究成果の一部である。

戦時下における湯浅八郎のアメリカ滞在の実態

略年譜（総長辞任後）

| 年月 | 事項 |
|-----------|---|
| 1937年 12月 | 同志社総長辞任 |
| 1938年 8月 | 神戸女学院 YWCA 修養会講師 |
| 1939年 1月 | 渡米、各地で講演 |
| 1939年 5月 | キリスト教国際主義への自覚 |
| 1939年 | ジュネーブ会議に出席 |
| 1939年 10月 | イェール神学校で開催された会衆派教会国際セミナーに参加 |
| 1940年 5月 | ニューヨークの日本協会（Japan Institut）で「日本のキリスト教」非公式講演 |
| 1940年 8月 | パークレーでの会衆派教会大会出席。この頃、ニューヨークのロイ・アカギ博士宅に滞在 |
| 1941年 1月～ | オリヴェット大学で1学期間「日本文化」を講義 |
| 1941年 12月 | 真珠湾攻撃で敵国人に、ボストン郊外のシーベリー宅で保護される |
| 1942年 5月 | ニューヨークへ移住、在ニューヨーク日本人救済活動に参加 |
| 戦時下 | 日系人強制収容所の慰問 |
| 1945年 8月 | 終戦 |
| 1946年 10月 | 帰国 |
| 1947年 | 同志社第12代総長就任（1950年まで） |
| 1947年 | 新島学園中学校・高等学校初代校長（1949年まで） |
| 1947年 | 新島学園初代理事長（1981年まで） |
| 1950年 | 国際基督教大学初代学長就任（1962年まで） |
| 1981年 | 召天 |

註

- (1) 辻直人「湯浅八郎と基督教教育同盟会—キリスト教教育をめぐる—」明治学院大学キリスト教研究所『紀要』第52号、2020年2月。
- (2) 同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想 湯浅八郎の日本とアメリカ』YMCA出版、1977年、59頁。
- (3) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書、58頁。
- (4) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書、58頁。
- (5) 武田清子『湯浅八郎と二十世紀』教文館、2005年、80頁。
- (6) Hachiro Yuasa, "I Chose to Stay In America", Envelope Series,

American Board of Commissioners for Foreign Mission, October 1942,
p.1.

- (7) 辻直人「湯浅八郎の国際感覚に対するアメリカ滞在の影響—イリノイ大学留学経験を中心に—」立命館大学社会システム研究所『社会システム研究』第36集, 2018年。
- (8) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 58頁。
- (9) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 143頁。
- (10) 武田前掲書(2005年), 80-81頁。
- (11) 武田前掲書(2005年), 82-83頁。
- (12) 湯浅八郎宛ダグラス・ホートン書簡(1940年7月10日付), 同志社社史資料センター蔵湯浅八郎文書。
- (13) 武田清子「思想史的に見た昭和期の学院——学生としての体験から——」神戸女学院百年史編集委員会『神戸女学院百年史 各論』1981年, 394頁。
- (14) 武田前掲書(2005年), 83頁。
- (15) 湯浅八郎他『私の生きた二十世紀』日本基督教団出版局, 1980年, 30頁。
- (16) 湯浅他前掲書, 31-32頁。
- (17) 同志社社史資料センター所蔵。
- (18) Yuasa *ibid.*, p.1.
- (19) 横浜に交換船が着いた時(1942年8月20日), 「清子夫人は『湯浅は帰って来なかった?』と言われ, あのしっかりした夫人がハラハラと涙を流された。短い伝言と預かり物(湯浅は夫人に日常の生活物資に不自由していると思えるので, シーツやタオルなどを武田に託していた, 引用者注)を届けた。」武田前掲書(2005年), 88頁。
- (20) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 66頁。
- (21) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 127-128頁。
- (22) Yuasa *ibid.*, p.1.
- (23) Yuasa *ibid.*, p.2.

- (24) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 128 頁。
- (25) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 128-129 頁。
- (26) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 60 頁。
- (27) 湯浅他前掲書, 27 頁。
- (28) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 61 頁。
- (29) 湯浅他前掲書, 28 頁。
- (30) Ed. By Ruth I. Seabury and HachiroYuasa, *Good Will to Man: A Message for Christmas 1942 - New Year 1943 and Years That Lie Ahead*, (同志社社史資料センター所蔵 湯浅八郎文書), p.3.
- (31) Seabury et al. *ibid.*, p.2.
- (32) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 61 頁。
- (33) 武田前掲書 (2005 年), 85 頁。
- (34) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 62 頁。
- (35) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 127-128 頁。
- (36) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 63-64 頁。
- (37) 同志社大学アメリカ研究所編前掲書, 133-134 頁。
- (38) Seabury et al. *ibid.*, p.8.
- (39) 「新島学園五〇年の歩み」編集委員会『新島学園五〇年の歩み』1997 年, 64-65 頁。